

か
た
り
つ
ぐ
お
も
い

く
終
戦
八
十
年
く

高山市遺族会連合会



「かたりつぐ おもい く終戦八十年く」の発刊にあたって

先の大戦が終結してから八十年が過ぎました。

あらためて、過去の大戦で犠牲になられた多くの御霊に、心から慰霊の誠を捧げます。振り返れば、昭和十六年十二月八日、太平洋戦争へと突入し、全国で三百十万人余の戦争犠牲者をもたらし、高山市でも三千人を超える尊い命が犠牲となられたほか、町の一部が取り壊される等の多大な被害を残して、昭和二十年八月十五日に終戦を迎えました。

その間、戦時中戦後の戦争犠牲者、戦没者遺族の悲しみ、そして市民が生きるために堪え難い苦難を必死で乗り越えてきた結果、今日の平和な日本が築かれたといえます。しかし、戦後八十年も経過すると、この平和への道のりが、徐々に忘れ去られようとしています。

私たち高山市遺族会連合会は、過去にあった戦争の事実を記録に残し、戦争の悲惨さを次の世代の人々に伝え、二度と戦争を起こさない、平和の大切さを将来まで語り続け

るために、「かたりつぐ おもい く終戦八十年く」を発刊いたしました。

この記録集は、過去の大战の一部分を語るものですが、今後の平和を語り継ぐためのテキストとなることを願っています。

本記録集の発刊にあたり、多大な貢献をしていただいた高山市、公益財団法人たかしん地域振興協力基金をはじめ、編纂委員の中林利数様、金井信様、糸田恵子様、また資料等を提供していただいた皆様に対して、謹んで感謝とお礼を申し上げます。

二〇二六年 三月

高山市遺族会連合会 会長

小林 浩

副会長 大家 忠

副会長 黒内 章 一

役員 一同

「かたりつぐ おもい く終戦八十年く」の発刊によせて

戦後八十年という節目を迎え、私たちは歴史の重みを痛感し、先人たちの尊い犠牲に思いを寄せます。先の大戦では、高山市において、三千人を超える尊い命が、祖国の未来を願って捧げられました。

この記録集には、特攻隊員や戦死された方々の遺書、戦争体験談が収められています。彼らの言葉は、ただの記録ではなく、私たちが未来を築くための貴重な教訓です。私たちは、過去から学び、未来をいかに築くべきかを考え続けなければなりません。戦争の悲惨さ、そして平和の尊さを忘れないために、この記録集は欠かせないものです。

高山市では、九月二十一日を「高山市平和の日」と定め、平和の大切さを広めるための取り組みを進めています。学校や地域では、平和学習を通じて戦争の歴史を学び、その教訓を生かして行動できる社会を築くことの大切さをともに心に刻んでいます。戦後八十年を迎えた今、命や平和の尊さを次世代にしっかりと伝えていくことが、今を生きる私たちの責務であるとの思いをさらに強くしています。

本記録集が、多くの方々の手に取られ、歴史を学び、そして平和を願うきっかけとなることを心より願っております。

二〇二六年 三月

高山市長 田中 明

目次

「かたりつぐ おもい く終戦八十年く」の発刊にあたって

高山市遺族会連合会 会長 小林 浩 1

「かたりつぐ おもい く終戦八十年く」の発刊によせて

高山市長 田中 明 3

本書中、現在では差別的で不適切と思われる語彙・表記がありますが、時代背景等を考慮し、原文のまま掲載いたしました。

なお、本書に掲載している写真・文章等の無断使用・転載を禁じます。

遺書・戦地からの手紙

遺書

(向島 幸一)

家族にあてた手紙

(橋爪 清四郎)

遺言状

(梶家 長二)

戦地からの手紙

(水口 儀一郎)

上官からの手紙

(瀬上 賢孝)

手記

家族の無念と失意

(松井 嵯峨)

平和への思い

(西本 孝司)

私の満州

(下島 智恵子)

引揚げ

(下島 智恵子)

・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
38	34	30	26	22	21	17	15	9

戦争について

(中家 春農)

・
・
・
・
・
・
・
・
97

あずきな

(田口 宝)

・
・
・
・
・
・
・
・
95

用語の解説

・
・
・
・
・
・
・
・
94

資料

寄せ書き、各種証明書

(小島 政一)

・
・
・
・
・
・
・
・
92

遺品

(酒向 繁造)

・
・
・
・
・
・
・
・
91

出身地別戦没者内訳

・
・
・
・
・
・
・
・
90

高山市平和都市宣言

・
・
・
・
・
・
・
・
89

特攻隊員 向島幸一氏 の遺書

遺書

田力の死場所と得身を挺して任
務に向ひます

完全に盡し得たか それのみと氣
を遣ふが 我身の持つ全枝倆と
全精神力を此の一事に使ひ果して
事大當りなり

二十余年一日として度る事なき愛憎を
傾希成人させて下さりました御両親様
へ何一事も仕得ぬ不孝者の身一であ
りながら 任務遂成と聞かれぬから家
族揃って氏神様へ御礼参りし何事
計へは祝の解りやつて喜びと共にして
下さい

老いゆく皆様が年暮り考へ下り黙として
生産陣へ馳せ 帰春の度毎御励み下
さいと言葉を想ひて後顧の憂は何一つ
御座居ません

此は御代は男と生れ
我もまた

水楯と何で散る、嬉しう

皇不非常の此の秋男と生れ来た喜び
何物も例へられません 此の身は太平洋
の魚族を腹すも幾度か生れ来り
聖業を翼讚し奉ります

皇不非常の此の秋男と生れ来た喜び
何物も例へられません 此の身は太平洋
の魚族を腹すも幾度か生れ来り
聖業を翼讚し奉ります

死後の事と関しニ書きませう

一私の体は一片の肉も残り人のか普通です
一弟は此度並隊でやつてこれよりから家では
極く早く悲しみと異り喜びより間違ぬ様
一女性金銭関係はありませぬ

一特攻隊日誌の裏に書いてある事は生身の文
を謝罪手紙と差上げて下さい
一私(下)する金は御両親の隨意ですが生身の念
願たる家の改築(一部)を御使用下さい 以上

神の試練に堪えられぬ人、御風は吹き
ませぬ、天佑は望まれませぬ
皆様を力と合せ、朗らかに強く正しく
生きられて皇國民の務を果されん事を
御願ひ申上る所を

最後に
天皇陛下の萬歳を唱へ
皇國の彌榮を祈りつ、

幸一

御父上様
御母上様

※原本は、知覧特攻平和会館(鹿児島県)に保管

遺書

男の死場所を得 身を挺して任務に向ひます
完全に盡し得たか それのみ気になります
が 我身の持つ全技倆と全精神力を此の一事
に使ひ果して事に當りました

二十余年一日として変る事なき愛情を傾け成人させて下さいました御両親様へ何一事も
仕へ得ぬ不孝者の幸一でありましたが 任務達成と聞かれましたら家族揃って氏神様へ
御礼参りをなし隣近所へは祝ひ餅でもやって喜びを共にして下さい
老い行く皆様が年輩も考へず黙々として生産陣へ馳せ 帰省の度毎御励まし下さる言葉
を想ひて後顧の憂ひは何一つ御座居ません

此の御代に男と生れ

我もまた

御楯となりて散るゝ嬉しさ

皇国非常の此の秋 男と生れ来た喜び 何物にも例へられませんが 此の身は太平洋の魚
簇を肥すとも幾度か生れ変り聖業を翼讚し奉ります

死後の事に関し二、三書きます

一、私の体は一片の肉も残らんのが普通です

一、弔ひは屹度軍隊でやってくれますから家では極く軽く悲しみと異り喜びですから
間違へぬ様

一、女性、金銭 関係はありません

一、特攻隊日誌の裏に書いてある方には生前の交を謝す手紙を差上げて下さい

一、私へ下さる金は御両親の随意ですが生前の念願たる家の改築へ一部でも御使用下
さい

以上

神の試練に堪えられぬ人に神風は吹きますまい 天祐は望まれません

皆様 益々力を合せ朗かに強く正しく生きられて皇國民の務を果されん事を御願ひ申上げます

最後に

天皇陛下の萬歳を唱へ

皇國の彌榮を祈りつゝ

御父上 御母上 様

幸一



後列右から2人目が、向島幸一氏

向島 幸一

第19振武隊 少尉

昭和20年5月4日出撃

沖縄周辺洋上にて戦死 23歳

高山市清見町出身(5人兄弟の長男)

出撃機種：1式戦闘機「隼」

東京陸軍航空学校に入校(15歳)し、戦闘機の操縦員として満州に配属。その後、教官となったが、教え子たちが自分より先に戦死するのを目の当たりにし、特攻隊に志願する(家族は知らなかった)。昭和20年冬に、突然実家(清見)に帰省し、弟に跡継ぎを頼む。両親と弟が、雪の中、高山駅まで見送り、幸一氏は「行ってきます」と敬礼して汽車に乗り込んだ。出発までだいぶ時間があったが、車中で顔をあげることも、手を振ることもなかった。



後列左1人目が、向島幸一氏
写真の裏には「成功したら役場か学校で欲しいと
云はれたらやって下さい」と書かれている。



昭和20年5月4日、午前4時ごろ
三角兵舎で出撃の準備をする第19振武隊員
右から3人目が向島幸一軍曹